

カリフォルニアの風

第3号 令和8年6月10日 発行

サンフランシスコ日本語補習校

校長 相澤 順

「運動会を通して育つ力」

幼小部サンノゼ校（5/30）、幼小部サンフランシスコ校（6/6）の運動会が無事終了しました。

サンノゼ校は穏やかな晴天の下で、サンフランシスコ校は強風による肌寒さの中での開催となりましたが、どちらの会場でも大きなけがや体調不良者はほとんどなく、子どもたちが最後まで元気に活動できたことを何よりうれしく思います。

補習校では、運動会の準備や練習に十分な時間を確保することが容易ではありません。限られた授業時間の中で練習を重ねるだけでなく、実際の会場を使用した全体練習を行うことも難しい状況です。そのため、子どもたちの中には「本当にうまくできるだろうか」と不安を感じていた人もいたことでしょう。しかし、本番では一人ひとりが自分の競技や演技に真剣に取り組み、仲間と力を合わせながら精いっぱい力を発揮していました。また、自分の所属する紅白のチームや友達に懸命に声援を送る姿も数多く見られ、大変頼もしく感じました。

運動会は単に体を動かす行事ではありません。目標に向かって努力すること、仲間と協力すること、ルールを守ること、人を応援すること、そして最後までやり抜くことなど、学校教育が大切にしている多くの学びが詰まっています。勝敗が決まる場面もありますが、その中で喜びや悔しさを経験し、自分自身や仲間の成長を感じることも大切な学びの一つです。

特に海外で生活する本校の子どもたちにとって、日本の学校文化や伝統的な学校行事を体験する機会は決して多くありません。運動会は、日本の学校で長く受け継がれてきた教育活動の一つであり、子どもたちが日本語を使いながら仲間と関わり、日本ならではの集団活動や協働のよさを体感できる貴重な機会です。競技や演技だけでなく、開会式や閉会式、応援活動、係活動などを通して、日本の学校文化や価値観を自然に学ぶことができます。その意味でも、運動会は補習校の教育目標を実現するうえで、大きな意義を持つ行事であると考えています。

また、今回の運動会の成功は、子どもたちの頑張りはもちろんのこと、その成長を支えてくださる多くの方々のご協力によって実現したものです。限られた条件の中で準備や運営に尽力した教職員、当日の運営を支えてくださった保護者ボランティアや卒業生ボランティアの皆様の存在なくして、円滑な実施は成し得ませんでした。子どもたちのために多くの方々が力を合わせてくださったことに、心より感謝申し上げます。

ご来賓の皆様、保護者の皆様には終始温かいご声援をいただき、誠にありがとうございました。今回の運動会で得た達成感や仲間との思い出が、子どもたちの心に深く刻まれ、今後の補習校での生活や学びへの自信と意欲につながることを願っています。



【初めての「つなひき」幼稚園:SJ校】



【最後まで投げ続けます！1・2年「玉入れ」:SJ校】



【全員による恒例の「大玉ころがし」:SJ校】



【横一線で疾走！3・4年「徒競走」:SF校】



【上手にポーズ！1・2年「ダンス」:SF校】



【アンカー勝負！「高学年紅白リレー」:SF校】

「なぜあの子は自ら学ぼうとするのか ～放っておいても伸びる子の秘密～」

5月23日 幼小サンフランシスコ校 家庭教育懇談会より 教頭 和地恵美

日頃より、本校の教育活動にご協力いただき、誠に有難うございます。

長年、このお仕事をさせていただき、たくさんの素敵な子供たちと出会いました。ご両親と話をして、「ああ、こんな風に子育てをされたから、こんな素晴らしい子に育ったのね」と納得することはばかりでした。その蓄積したノウハウをお伝えしました。

共通していたことは、「褒める」です。日頃から、具体的に、その場で、結果よりも過程を褒められてきた子は、何度でも挑戦をします。自分で考え、最終的に自分で判断するので、人のせいにしません。何かあっても、立ち直ります。学ぶことを楽しみます。そして、支えてくれた人に必ず感謝の気持ちを言葉にします。そういう子は社会に出たときどれだけ多くの方から頼りにされ、愛されることでしょうか。

写真は東京パラリンピック開会式の直前に出会ったガーナの選手です。パラリンピックには、人生のどこかで大きな困難に出会い、それでも立ち直って夢を追い続けた人が集まる大会です。パラリンピック村で彼らと過ごした三週間は、初日から感動の連続でした。

実はパラリンピックの開会式では、コスチュームにも厳しい規制があって、登録したものの以外、身に付けられません。でも、ガーナの選手たちは鶴のレイを首に掛けて参加しました。このレイは、コロナ規制に抗って、事前受け入れを決めた福島猪苗代町から贈られたものです。ガーナ国旗の色紙を用意して折られたのでしょう。猪苗代町の勇気と優しさに、ガーナ選手団が応えたのだと分かります。彼らは世界が見守る中で、日本人の真心を伝えてくれました。生活に不便があっても、周りの人を信じて道を切り拓いてきた彼らだからこそ、選択できたことなのだと思います。折り鶴を通して、国境を超えて信じあう心が響き合った瞬間でした。

成績や地位も大切だけど、子供たちには、こういう気骨のある、優しさに裏打ちされた勇気のある大人に育って欲しいと願っています。

それでも、褒めることは難しい一面もあります。しっかりした子になって欲しい一心から、つい叱ってしまう気持ちも分かります。私の長男はこだわりが強く、集団行動が苦手です。卒園式で証書を受け取ろうとしないわが子を抱えて園庭へ出て、「もう、お母さん辞める!」と言ってしまったことがあります。後で二人で泣きながら園長先生から証書を受け取りました。そんな私にママ友が掛けてくれた言葉があります。子育てに悩みながらも頑張っている皆様に贈ります。

「子供ってね、生まれてくる前に天から見ていて、『このお父さん、お母さんなら、自分を可愛がってくれる』と信じて生まれてくるんだって」と。

なんの科学的根拠もない言葉でしたが、私にとっては生涯支えとなっている希望です。

